



山下 俊史

日本生活協同組合連合会
顧問

英国の友人に学んだ協同組合間協同

写真の一枚は、ボブ&ジュディ・バールトン夫妻の自宅に招かれた時のものです。

もう一枚は、彼らの生協店頭で業界初のフェアトレード・エコバッグをスタッフと共に掲げているものです。

なぜこの二枚を選んだのか。ボブ・バールトン氏が英国生協と国際協同組合同盟(ICA)の改革に力を尽くし、私たち日本の生協人を率直な物言いで励ましてくれた人だからです。

私が初めてボブ・バールトン氏に出会ったのは、英国生協がどん底のころでした。ICAソウル総会(2001年)に参加した氏が日本に立ち寄り、私の所属していたコープとうきょう(現コープみらい)の店舗を見学。彼が組合員との交流の中で発した「合併したい」という言葉が私の気持ちに響きました。

た。グローサリー市場シェアが23%から4%に低落した英国生協を立て直すために、彼は、合併や仕入統合を進めようとしていました。私は県域を越えて事業展開できるようにするために、生協法改正の提起を考え始めていました。翌年、英国を訪問した私たちに対する彼のメッセージは、「協同組合間協同」による「クリティカル・マス」の獲得でした。

その後も、彼はICA生協委員会での踏み込んだ議論の中で、「生協法改正の取り組みは進んでいるか?」「国際会計基準には対応できるか?」など、気配りを示してくれたものでした。国際チェーンストア協会(現コンシューマー・グッズ・フォーラム)パリ総会から、ICA生協委員会の運営打ち合わせのためバーミンガム空港に足を延ばした折には議論に熱が入り、テロ誤報であやうく閉め出されるところでした。

ボブ・バールトン氏が英国生協の危機からの再起を託したのは「倫理的消費」というコンセプトでした。写真で私たちが手にしているエコバッグは、フェアトレードの無漂白綿で作られていて、中にはフェアトレード商品が入っています。風力発電などクリーンエネルギーや、ポストオフィスなどの地域貢献にも力を注ぎ、社会全体に責任を負う「団結する協同組合(Co-operatives United)」のあり方は、日本の生協にとっても注目されます。



バールトン夫妻と



生協の店舗で